

ニュータウン 大麻団地40年

<5>

「いらっしゃいませ。江別の特産品はいかがですか。試食もどうぞ」

大麻銀座商店街の空き店舗で、毎週土曜日、若々しい声が響く。販売するのは酪農学園大・農業経済学科の工藤英一教授(み)のセミナーだ。

ここでマチが明るくなる」と話す。

工藤セミナーは、〇一年に市内の商店街調査を行ったのをきっかけに、大学が近接する大麻団地でマチづくりに商店街活性化への参画、提案に取り組みようになった。工藤教授は「高齢

学生パワー

実験店舗「クラスタークラブ」。江別や学生の出身地の特産品、大学の乳製品を販売する。二〇〇二年の開店以来常連客も増え、一日百五十―二百人の住民が訪れる。

頻繁に利用する六十代女性には「対面販売で話ができて、何より若者がいる

化が進むと歩いて行ける商店街の価値は高い。商店街を応援する活動として学生がやる気になっている」と強調する一方で、「ただ、まだまだ学生の参加が足りない」と打ち明ける。

店長の四年生大村すみれさん(み)は「マチづくりにかかわることができ、学生

活用 絞り知恵 店舗空き



にとっても経営の現場を学べる機会。益金を使ったイベントも考えたい」と意欲的だ。

近年大麻団地で目立つ空き店舗。その再利用をめぐっては、同クラブのほかにも札幌学院大生らが実験的

「週一回」の実験店舗「クラスタークラブ」の光景。地元住民との交流の場になっている。13日

動法人(NPO法人)「当別町青少年活動センターゆうゆう24」が秋に、その出先を同商店街の一角に開く準備を進めているのだ。

ゆうゆう24は〇二年、当別町の空き店舗を同大学生のボランティアの活動拠点として発足、昨春にNPO化し、地域生活支援事業所となった。現在は卒業生らによる若手職員九人体制で、学生スタッフ四百五十人が障害児の療育支援、イベント支援など、各種の事業を進める。

大原祐介所長(み)は抱負を語る。「障害児の療育支援では江別からの利用が多く、自宅に近い場所で見守るのを望ましく、また近くに三大学があり、学生ボランティアが多く見込まれることが大きい。学生の力をうまく生かし、微力ながら地域に貢献したい」

第③部 模索